慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	19世紀前半キューバ独立を巡る一論争 : プラ師とアランゴ博士
Sub Title	Una disupta en torno a la independencia de Cuba en la primera mitad del siglo XIX : Arzobispo de Malinas Fray Pradt y Doctor Arango
Author	前田, 伸人(Maeda, Nobuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.34 (2019.) ,p.187- 211
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20190630-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

19世紀前半キューバ独立を巡る一論争

――プラ師とアランゴ博士――

前　田　伸　人

はじめに

1．問題の所在

大国が混乱したり滅亡したりすると，その属領だけでなく，もっと広範な国際関係そのものが大きな変動を被ることが多い。旧ソ連の崩壊は言うまでもない。19世紀初頭ナポレオンの擡頭とそれに伴う変動も好例だ。彼がスペイン・ポルトガル両国に侵入して両国の王室を廃すると，イベロアメリカ諸国はそれぞれの思惑を持ちながら独立へと歩み始めた。そうした新しい情勢を前に，復辟を達成した両イベリア諸国，ナポレオン以前の旧秩序を回復・墨守する多くの欧州諸国，新秩序を容認する英米諸国は，それぞれのやり方で新大陸に対応・介入を展開した。

一方，スペインに残留した地域にしても，その地域自身の思惑や周辺国を含めた国際関係に翻弄される事態を迎えた。その一つであるキューバ島は，地政学的要衝に位置していただけでなく，産業の点でもサトウキビ生産を軸として殷賑を極めていたから，その去就は欧米諸国にとっても関心の的だった。こうした形成途上にある新たな秩序を把握してその意味を解釈・考察した論者もその中で多数登場することになる。

そこで，本稿では二つのことを考究したい。一つ目は，19世紀の変動期をしたたかに生きたフランス知識人を取り上げて，スペインに残留したキューバ島がやがてどんな運命を迎えることになるかを考察した，彼の論理

を辿ることである。二つ目は，その論考を受けて，キューバ島生まれの有力なクリオーリョの一人が行った反駁の中身を明らかにすることである。これら二つを通して，19世紀初頭におけるキューバ島の置かれた状況に対する自己認識と他者の視線の一部を明らかにできよう。さらには合衆国との関係がより緊密になる19世紀半ば以降の情勢とは異なる時代の相を明らかにする一助となろう。

この論考で扱う論者は，一人がドミニク・ドゥ・プラ師（1759-1837）。以下，プラ師と略す）である。フランス革命期を巧みに生きた人物である。メヘレン（またはマリーヌ）大司教と呼ばれ，ジャーナリスト宜しく，欧州や新大陸に関して多数の著作を量産した人物であった。今一人がフランシスコ・デ・アランゴ・イ・パレーニョ（1769-1839）。以下アランゴと略す）である。キューバ生まれの白人で，法学士として法律の起草や提言を行い，政治的要職にも就いた人物である。同時にジャーナリスティックな活動にも広く手を染めた人物でもあった。

2．先行研究や書誌

ここでは，プラ師やアランゴの著作や彼らに関して論じた研究書などに就いて略述しておこう。まずはプラ師である。彼の著作は多数あるがいくつかを引いておこう。『植民地の三段階の年齢：その過去，現在，未来の状態について』三巻本（1801-02年）[(1)]，『アメリカ大陸の植民地と現在の革命について』三巻本（1817年）[(2)]，『欧州に対する，列強であるロシアと英国の並行関係』（1823年）[(3)]等がある。その多くが，スペイン・ポルトガル領アメリカの記述に頁を割いているのがわかる。

---

(1) Dominique de Pradt, *Les trois âges des colonies, ou de leur état passé, présent et à venir*. 3vols. (Paris: Guguet et Cie., 1801-02).

(2) Idem., *Des colonies et de la révolution actuelle de l'Amérique,* 2vols. (Paris: F.Beuchet, 1817).

(3) Idem., *Parallèle de la puissance anglaise et russe relativement à l'Europe*. (Paris: Bechet Ainé, 1823).

プラ師を巡る研究書についても触れておこう。それまで王党派だったイトゥルビデがメキシコ独立論者に変わり，メキシコを帝政にして自ら皇帝になる契機を与えたのが，他ならないプラ師の所見であったことに目を向けた研究書がある。それが，グアダルーペ・ヒメネス・コディナッチ『1821年におけるメキシコ：ドミニク・ドゥ・プラとイグアラ計画』（1982年）である[(4)]。また，プラ師と南アメリカの独立論者との関係を論じたのがマヌエル・アギーレ・エロリアガ『イスパノアメリカ解放におけるプラ師』（1983年）である[(5)]。その中では，独立戦争末期の1821年，コロンビアのククタ会議でプラ師を含む6人に感謝状を決議したこと，独立戦争の総帥であるシモン・ボリーバルがプラ師を激賞し，かれをコロンビアに招請し年金を授与する構想が記されている。他にも時代が遡るが，ローラ・ボルンホウルト『プラ師とモンロー宣言』（1944年）がある[(6)]。中南米とプラ師の繋がりが多いという通説に対して，北米に対しても彼の関心や繋がりがあったことを明らかにしている。あと，中南米諸国の独立に対するフランス外交の関心ぶりをまとめた作品に，ウィリアム・スペンス・ロバートソン『フランスとラテンアメリカ独立』（1967（原著1939）年）がある[(7)]。独立後の中南米諸国に関し，共和国に代わる王政構想の記述などに詳しい。

次にキューバのアランゴである。卓越した才能を持つ法学士として，啓蒙時代の流れを引く，諸産業を通じて国の振興を構想した自主的組織アミーゴ・デル・パイス（“国の友”の意味）に参加したり，各種の提言を行

---

(4) Guadalupe Jiménez Codinach, *México en 1821: Dominique de Pradt y el plan de Iguala* (México: Caballito, 1982).

(5) Manuel Aguirre Elorriaga, *El abate de Pradt en la emancipación hispanoamericana 1830–1930* (Caracas: Univ. de Andrés Bello, 1983).

(6) Laura Bornholdt, “The Abbé de Pradt and the Monroe Doctrine,” *HAHR*, Vol.24, Nr.2, pp.201–221.

(7) William Spence Robertson, *France and Latin-American Independence* (New York: Octagon Books, 1967).

なったり，行政にも参与したりした。貿易自由化や産業育成，黒人奴隷の輸入について論じた著作が多い。彼の代表的な評論や論文などを収録しているのが，『フランシスコ・デ・アランゴ・イ・パレーニョ博士著作集』全二巻（1888年）である[8]。例えば，第一巻には，冒頭にアナスタシオ・カリーリョらの執筆したアランゴへの賛辞が収録されている。そのあとに，例えば，「黒人貿易に関する最初の文書」，「ハバナの農業とそれを育成する手段に関する講演」を見ることが出来る。第二巻にはドイツ人探検者・地理学者であるアレクサンダー・フォン・フンボルト『キューバ島に関する政治的試論』に関する所見，本稿で俎上に載せる「この島の独立に関する，あるハバナ人の所見」も収録されているが，ここで使用するのは単独のパンフレット版を使用する[9]。

彼に関する研究書を一つ挙げておこう。アランゴの伝記を包括的に記したのが，ウィリアム・ヘイトリー・ピアソン『フランシスコ・アランゴ・イ・パレーニョ』（1936年）である[10]。前半は彼の生涯の略述，後半が彼の農業論や奴隷論が簡潔にまとめられている。また，直接に関連したものではないが，後になって出版された著作には，ハコボ・デ・ペスエラ・イ・コボ『キューバ島に関する，地理的・統計的・歴史的辞典』４巻本（1864年）がある[11]。ある意味，フンボルトやアランゴが記述したキューバ島地誌の流れを汲んだものと言える。

---

(8) Francisco Arango y Parreño, *Obras del Exmo. Señor D. Francisco de Arango y Parreño*, 2 tomos (Madrid: Howson y Heinen, 1888-89).

(9) Arango y Parreño, Francisco. *Reflexiones de un habanero sobre la indepedencia de esta Isla* (Habana: Oficina de Arazoza y Soler, 1823).

(10) William Whately Pierson, “Francisco de Arango y Pareño,” *HAHR*, Vol.16, nr.4, pp.451-478.

(11) Guadalupe Jiménez Codinach, *México en 1821: Dominique de Pradt y el plan de Iguala* (México: Caballito, 1982).

３．章の構成

第一章では，啓蒙主義時代の18世紀からフランス革命の影響が浸透する19世紀にかけてのキューバ島の統治状況を簡単に述べる。中南米諸国独立時期は，武力が交わされただけでなく，同地域に利権を見いだす欧州諸国とりわけ英国による宣伝戦が仕掛けられたが，その様相を略述しておく。さらに，本稿で扱うアランゴによる反駁は，別の見方からすると，欧州による18世紀から執拗に続くスペイン観に対峙した，スペイン側からの反撃の一つと見ることが出来るので，その流れを記しておく。次に，第二章ではプラ師が執筆したキューバの将来予測に関する部分を訳出，解説を付した。続いて，第三章ではこのプラ師の論考に対するアランゴの反駁を検討する。プラ師の論考がハバナでスペイン語訳されるが，それに対してアランゴが翻訳の可否を検討し，また同時に師の諸説についても俎上に載せている。そして第四章でまとめを行う。

第一章　キューバ島を巡る状況

１．18世紀から19世紀にかけてのキューバ島統治

18世紀後半のスペインは，啓蒙主義的改革が加速した時代に当たり，国王カルロス３世が統治した。英仏が対立し仏にスペインが与した七年戦争発生時，1762年ハバナ市が英国に占領された。その苦い経験から，カルロスはカリブ海の戦略的拠点として同市の防衛を固めた。後年には一連の啓蒙主義的改革を推進した。その中には，自由貿易令がある。キューバはその法令から利益を得ている。さらに，1791年隣国のフランス領ハイチでフランス革命の影響を受けた黒人奴隷たちが蜂起して，サトウキビプランターを殺害した。独立へ向かう中で同地のサトウキビ生産が壊滅したおかげで，キューバはサトウキビ生産の重要な拠点に躍り出た。もちろん，その生産労働を担ったのが黒人奴隷だったから，アフリカからの奴隷輸入が激増した。

19世紀初頭，奴隷貿易がますます増加する状況に対し，同時に奴隷貿易

を停止し奴隷解放を推進しようとする提言や政策も登場してきた。ウィルバーフォースに代表される奴隷制廃止論者の動きが盛んになって，英国は自国内だけでなく，他国に対しても奴隷貿易の規制を求めるようになった。とくに，奴隷制が経済・社会の軸を形成するキューバやブラジルを抱えるスペインやポルトガルに対して，さらにはアメリカ南部に対して，廃止圧力をかけたのだった。キューバに対してというよりはスペインに対して，英国は1817，35両年に条約を結んでスペイン政府に圧力をかけ，ハバナの地に奴隷貿易を監視する趣旨から混合裁判所を設置させた。だが，英国の介入をものともせずキューバは奴隷輸入に努めた。

2．レジェンダ・ネグラ（黒い伝説）の流布

中南米諸国が独立を宣言してスペインと激しい独立戦争を展開する中で，英国は外交攻勢の一つとして，所謂“黒い伝説”を流言することに努めた。本来，“黒い伝説”とは，16世紀にオランダがスペインから独立を戦う中で，劣勢を挽回するためにスペインの非道ぶりを積極的に誇張して宣伝したのだった。ドゥ・ブリーが描いた版画に典型的に見ることが出来よう。画像であったからそれだけ効果的であったろう。オランダに肩入れする英国も同様に黒い伝説の流布に努めた。それだけでなく，スペイン人の書いた著作をも巧みに利用した。例えば，インディオに対するスペインによる搾取を告発したラス・カサス師の著作を翻訳して反スペイン文書にすら転用したのである。

19世紀初頭になると，とりわけ英国が積極的に既存の文書を反スペイン風な文書に変えて散布した。それによってスペインの力を弱め，スペイン領各地域の独立を励起した。そうした文書の中には，18世紀前半期にスペイン領アメリカにおける統治の非能率性を告発したアントニオ・ウリョアとホルヘ・フアンの著した『アメリカ秘密報告』があるし，セビーリャに居住してジャーナリスト活動に挺身したブランコ・ホワイトの著作もあった。尤も，前者は，現地生まれの白人役人がインディオを酷使することで

得た役得などを告発したのであって，むしろ本国から派遣した役人を登用することで，より多くの果実を取りこぼすことなく中央政府に吸い上げるという，搾取強化の役割が大きかったはずである。19世紀後半，『マックスハーフェラール』で蘭領インドにおけるオランダ統治が告発されるが，実は現地人役人に蔓延していた汚職を告発しているのと良く似ている。

3．スペインに関する論争

18世紀から19世紀にかけて，スペインが如何に後進的であるかを欧州諸国からさかんに主張されたので，スペイン人知識人は反駁する必要に迫られた。その代表例がバレンシア出身のアントニオ・デ・カバニーリェスである。彼はフランス留学時にスペイン科学の遅れを指摘されたことに立腹して，スペイン科学の優位性を説いた。もとより彼はブルボン朝による中央集権化以前にカスティーリャ王国と並んで有力なアラゴン王国の出身であった。それゆえに，カスティーリャ優位に対する反発から，一面でフランスによる指摘をある程度は認容したに違いないが，その論理を徹底すると，スペインの一部であるアラゴンも貶められる可能性がある。そこで出身地の価値を低減させないためにも，スペイン一般に対する誹謗を何としても退ける必要があったに相違ない。彼以外にも，パブロ・フォルネルもいた。それと同様なことが本稿で扱うアランゴに該当するのであるまいか。キューバ生まれの白人ゆえ，少なからず本国の白人と利益が相反していたと思われる。しかし，外国からの批判に対しては，スペインと大局的な利益を共有していたと考えられる。そういった観点からもアランゴを見ることができよう。

第二章　プラ師の論考

1．プラ師の生涯

プラ師はフランスの聖職者出身で，大革命の進展とともにその政治的転向をしばしば繰り返した。ある意味，節操なき人物の一人なのである。タ

レーラン，フーシェなどに並ぶ人物と言えよう。アメリカ大陸との関係で言えば，「聖職者法」を制定して黒人奴隷解放にも尽力したグレゴワール師と対照的な人物との評価もある[12]。

ナポレオンの擡頭とともに彼に取り入り，ベルギーにあるメヘレン（フラマン語ないしオランダ語表記。ワロン語ないしフランス語ならマリーヌ）大司教に任命される。そこから，後年になっても“元メヘレン大司教”の尊称で呼ばれることが多かった。ナポレオン失脚後には復辟した王政派に鞍替えしたが，余り報われなかったので，次第に自由主義派に接近した。1829年には，バンジャマン・コンスタンによる非難からシモン・ボリーバルを擁護したこともある[13]。

ヘゲモニー交替の時代を生きる中で，欧州，環大西洋の歴史や外交関係を考察した著作を多数執筆することになるのである。この章では，『欧州に対するロシアと英国との並行関係』第十三章「キューバと英国」に焦点を当てよう。次節ではその本文を訳しつつ，その筋を追っていく。

2．プラ師のキューバに関する叙述

『欧州に対する，列強であるロシアと英国との並行関係』は，欧州大陸の両端に有力な英国とロシアの二国が擡頭した現状を認識し，その両国が各地域に与えた影響を考察している。大陸国家と海洋国家という，対照的な国の興隆に注目している。本書の十三章では，英国とキューバの関係が考察されている。それでは以下の節ごとに各段落の訳文を記す。

---

(12) Marie-Cécile Benassy-Berling, “Note sur quelques aspects de la vision de l’Amérique Hispanique en France pendant la premiere moitié du XIXe siècle,” *Caravelle*, nr.58, p.45.

(13) *Loc.cit.*

2-1. 第一段落の展開

“この機会を捉えてスペインに対して非難を向ければ，残酷とは言えないまでも，不都合なことがあるかもしれない。実際スペインは，状況を悪化させないために，他のかなり多くの攻撃から身を守らねばならないのだ。しかも，アメリカ大陸至る所で離反されながらも，その大陸に対する主権を維持しなければならないと信じてきたし，それを確認するためにコロンビア等各国の港に入る船舶を，当然捕獲の対象であると宣言してきた。海賊たちは即座にカスティーリャの国旗を掲げ，見つけ次第船舶を襲撃した。海賊行為を行うスペイン人の艦長たちは，本国に見捨てられた上に人員も資金も受けられなかったので，捕獲品を得るとそこに自分たちの苦労に報いる慰安を見いだし，それを蓄財手段とした。英国の船舶も他国の船舶と同様，海賊行為から逃れられなかった。それどころか，英国の船舶は他国の船舶よりも計り知れないほどに多く，個々人の船舶が被った損害も多いと判明したので，英国政府は介入しなければならなかった。自分たちの代表を十分支えるだけの手段を持っていたから，代表たちの言い分には耳を傾けた。その結果，スペインはアメリカ大陸の女王で盟主たることを享受するために，二千万ピアストルを支払う羽目になった。諸君は何を望んでいるのか。両国はそれぞれ，良い悪いに関わらず両国の体面にとってふさわしいと判断できる価値を付けたのである。あらゆる利益から距離を置き，それゆえ判断を下すのに最適な立場にある人の中には次のように考える人もいた。その額つまり損害金は，アメリカ大陸を確保するあまり無益に失われた兵士の命ともども，むしろスペイン本国に投入されるべきであった。ブラジルに駐屯している軍隊をバイーアよりはリスボンに置いた方が良いのと同じ理屈だからだ，と”。(14)

(14) Dominique de Pradt, *Parallèle de la puissance anglaise et russe relativement à l'Europe* (Paris: Bechet Ainé, 1823), pp.119-120.

この段落から読み取れるのは，スペインはアメリカ大陸に対して主権を有していても，最早名目のものにすぎず，現地でゲリラ戦を展開するに過ぎない。それが度を越すあまり，却って英国に損害を与えてしまい，賠償金を払うことで辛うじて虚栄心を満たすにとどまる。むしろ，本国の再建に集中すべきであった，とスペインの実質的な弱体化を述べている。では，次節では第二・三両段落をまとめて訳そう。

2-2. 第二・三両段落の展開

> “何れにせよ両国の違いを見るに付け，大声が上がってきた。英国はキューバを占領することになるだろうし，スペインはキューバを割譲する，と。その口火を切ったのは，無謀なことが好きな合衆国の新聞だった。同様な喧噪が，これまた危険好きな英国の新聞によっても広言された。事実の示すところでは，これらの発表にどんな信頼が付け加えられるべきかであった。そのような割譲が問題になったことはそれまで決してなかったのだが”。[15]
>
> “善意でキューバを割譲する寄贈者は，その気前の良さが何を含んでいるのかを知っていたのだろうか。そして，特異な贈り物である譲渡がもたらす結果と同様，寄贈者と受贈者の性格と立場について省みたことがあったのだろうか”。[16]

スペインの弱体化を前に英米の新聞では，スペインがキューバ割譲を行う筈だという憶測が流れた。信頼度の低い言説であるが，もしそれが本当ならば，スペインと英国の思惑がそれぞれどんなところにあるか確認する必要があるはずだとプラ師は見ている。

---

(15) *Ibid*., p.120.
(16) *Ibid*., p.121.

2-3. 第四段落の展開

> “一般的にいって，スペインは割譲する準備がほとんど整っていない。人にも金にも事欠いているので，アメリカ大陸に対する主権を唱えているものの，想像上で不可能な主権に過ぎないと傍目には思われている。スペイン軍の敗残兵が追放された領土を奪還すべく戦いを継続しているが，成功する見込みもないまま本国との連絡も絶たれたままであり，血にまみれた忍耐を本国のために捧げていると見られている。そしてこうしたことを眼前に見ながら，スペインは何よりもキューバから離れつつあり，植民地の中で最も貴重で，既に喪失した植民地に比べて最も重要な部分であるキューバを自分自身で他者に譲渡しつつある，と見られているのだ。重要だというのは，キューバを通じてのみ，スペインは喪失した植民地に再び入り込むことが出来るし，メキシコや南アメリカに同調者を援助することが出来るからだ。そしてキューバにこそ，アメリカにおけるスペインの権力の源泉がある。しかもキューバに，スペインの軍隊と弾薬庫があるからだ。キューバをスペインから分離せしめよ。中国がスペインに禁止されているのと同様，アメリカ大陸はスペインには禁じられている。それゆえ，広言されている割譲の話題は物事の本性に反していたのだ”。[17]

英米の新聞によるとスペインは弱体化しているので，キューバを割譲する筈だと思われている。だが，キューバかあるからこそ，スペインは財政を維持できるし，メキシコなど中南米に睨みを利かせてその地域の親スペイン派と手を結ぶこともできるのである。よって，キューバを譲渡することはスペインにとって余りに損失が多いので，この説は嘘だとプラ師は考えているのである。続いて第五段落へ移ろう。

---

(17) *Ibid.*, pp.121-122.

2-4. 第五段落の展開

> “キューバ獲得の便宜は考慮されねばならないし，長所と短所とは比較考量されなければならない。キューバは多くの点において，英国にとって役に立つ可能性があるし，英国が切望する可能性すらある。獲得するのに必要な賠償金はとても多く費用がかかるのではないだろうか。英国は自分で保持できないくらいの領土と植民地を持っている。つまるところ，世界は一つの国に属することは出来ない。キューバはとても広がった国である。人口も多い。その習慣，宗教，言語にしても英国風ではない。奴隷の数も多い。英国は既にかなりの数の奴隷を抱えている。この新しい資産，広くて不穏な土地を保持するとすれば，英国は軍隊の一部を割かなければならないだろう。キューバを譲渡することがあれば，それは確かにスペインの問題であろう。だが，譲渡されることをキューバが臨まないのなら，キューバに戦争を仕掛けるしかないだろう。そしてこの戦争は英国により行われることになろう。というのも，スペインにはそのための手段も意志もないことは確かだからだ。この割譲と獲得はそれゆえ，その計画の首謀者たちが考えるほどに単純ではない。それどころかより強力なのは誰かを示そう”。[18]

プラ師は，今度は英国の姿勢に注目し，同国がキューバを獲得する可能性は少ないと述べる。その理由には複数ある。キューバ島を獲得するのに賠償金が多額に上ること。すでに領土・人口を抱えていること。両国間で言語や習慣などが異なること。キューバが黒人奴隷を多く抱えているので，治安・反乱防止対策に軍隊の数を割かねばならないこと。万が一，譲渡が決まったもののキューバ自身が拒否する場合，英国はスペインに代わってやむを得ず同島に戦争を行わねばならないこと。以上の理由を挙げて，英

---

(18) *Ibid.*, pp.122-123.

国にはキューバ獲得への野心がないことを述べている。それでは次の第六段落に移ろう。

2-5. 第六段落の展開

> “英国は，北米から南米に通ずる航路上にあるバハマ島にとても強力な前哨基地を持っている。しかも，スペイン領の南アメリカ大陸に近いトリニダード島を領有している。もし諸君がキューバをこの二重の戦略拠点に加えるのなら，メキシコ湾と南北アメリカ大陸を両方向に行き来できる水路という要衝が英国の手の内にあることになる。その時から，メキシコ湾は閉ざされた海域になる。アメリカ連合西部諸州全土の大きな出口は，ミシシッピー川とニューオリンズ市により構成されているが，英国の態度で如何様にでもなる。二つのアメリカ大陸の欲求と自由に対し，そして欧州の全国民による航海に対して，英国がこのように侵入してくれば，余りに甚大な結果をもたらすので，認容されるにしても両半球において広く連なった反対と苦情を必ずや伴うのだ。英国はすでに地球の多くの地点に登場しており，海上覇権はとても長距離で厚みがあるので，英国が新たな領土を取得するのを邪魔しようとしても確かに非常に困難が付きまとうだろう。以上が英国によるキューバ占領の意味するところだ。軽率にキューバを譲渡しようと考えた者は，それが含んでいる事柄全体を必ずしも見ていなかったと信じてよい”。[19]

英国は，カリブ海域の南北入口にトリニダード島とバハマ島という戦略的に重要な要衝を抱えているから，同地域の覇権を掌握していると言える。それに飽き足らず，もしキューバを確保しようとすれば，各国の反対に遭

---

(19) *Ibid.*, pp.123-124.

うことは必至である。それでも，各地域で制海権を保持しているので，キューバ譲渡を一旦決定すれば，各国がそれを妨害するのは至難の業である。よって，国際関係を考慮すると軽々しくキューバを譲渡できない筈であるとプラ師は述べている。

2-6. 第七段落の展開

“それ以外，疑問のすべては全く無益だった。そしてその主題のおかげで，私は長い間心の内に温めていた考えに引き戻される以上，次のように言わねばなるまい。理性がそうすることを命ずるように，キューバの運命とアメリカの運命とを結びつければ，誇り高きその島はそれだけで偉大な国を構成する可能性があるが，アメリカ大陸自身に刻み込まれた動乱の流れの中に，忽ちのうちに運び込まれてしまわないとも限らないのだ。キューバはスペインのものでも英国のものにもならず，独立することになろう。キューバは誰のものでもなく，あくまで自分のものとなろう。キューバは保持すべきでも，譲渡すべきでもなかろう。だが，今日，もはや残っているのは，保持すべきか譲渡すべきかという事柄の本質しかないのだ。それ以外はすべて名目的で一時的なものに過ぎないというものだ。キューバは自分自身で自由になるか，然らずんばアメリカ大陸の隣人諸国により解放されることになろう。スペインや欧州諸国が悪事を働くのに利用しかねない通路が自分たちの近くにあることを隣国が放置しておくだろうと信ずる理由があろうか。それは物事の本質に反しており，キューバは自由になるだけでなく，共和体制であるべきだろう。というのも，海を越えて介入する権利があれば，アメリカ大陸にある共和国は，その統治体制と余りに驚くべき対照的な王国の樹立に耐えられないのは，欧州の王政が身近に共和国があるのに耐えられないのと同じであろう。共和国を目の当たりにして当然煽動されれば，臣民たちの精神と眼を驚かせるの

に十分だと王政には思えるだろうから”。[20]

ここではキューバ自身の力量に注目が向けられている。キューバはそれ自体で独立を達成できよう。新大陸にある独立した諸国にしても，スペインを始めとする欧州諸国の介入を回避したいので，キューバの独立とその共和政化を支持することになろう。こうした面から，キューバの独立・共和制化は不可避である，と師は説いている。では，最後の八段落に移ろう。

2-7. 第八段落の展開

“以下のことを語り，それを顧みるように導かなければなるまい。つまり，二つの旗が欧州の両端に掲げられ，二つの社会体制もまた二つの両半球に樹立される。共和制の星が凱歌を上げながらアメリカ大陸全体上空に昇り，ついにはこの領域だけを照らしていき，欧州は王政地域に留まるだろう。こうした世界の分割はまだはっきりした形を取っていない。それはとても矛盾に満ちながら構成される陣営の間に，必然的に新しい光景をもたらすであろう。こうして形成されるがままの影響力から身を守るために，これまで予防するのに投入してきた以上の賢明さを必要とするだろう。しかし，それはかなり強力だった。とても軽率な予測をしていたなら，アメリカ大陸は今日欧州と同じく王政になっていただろう。それならばアメリカの王政は，欧州の王政にとって支点として役立っただろう。現在の状態では，欧州の王国はアメリカ大陸の共和制の影響から身を守るのに懸命だろう。そのことは知られてきた。しかし，その警告は文筆家たちにとっては，侮辱の価値しかなかったのだ”。[21]

---

⑳ *Ibid.*, pp.124-125.
㉑ *Ibid.*, pp.125-126.

欧州に二つの体制ができるように，アメリカ大陸のある西半球と欧州のある東半球との間でも，政治体制に鋭いコントラストが登場しつつある。西半球には共和体制の諸国が，東半球には王政の諸国が登場している。以前の軽率な予測では，アメリカ大陸は王政になるかと思われたが，現在では欧州に王国が多いが，逆に新大陸には共和国が次々と誕生している，とプラ師は見ている。

2-8. 論考の基調

以上から「キューバと英国」に見るプラ師の主張は次のようにまとめられる。他国に譲渡されるのではないかという憶測が流れるが，それに反してキューバは必ずや独立し共和制を取ることになろう。その理由にはいくつかある。キューバを保持しているからこそ，スペインはドル箱を抱え，中南米地域に睨みを利かせられるからだ。大国である英国にしても取得したり維持したりする費用の大きさで同島を断念するに相違ないからである。また，キューバ島自身も自活できる能力があること。さらに，独立した共和制のアメリカ諸国から影響を受けることになる，と言えよう。

第三章　プラ師に対するアランゴ・イ・パレーニョの対応

1．アランゴの動き

アランゴは1823年に『この島の独立に関する，あるハバナ人の所見』と題した論考を出版した。この中で，第二章で挙げたプラ師の著作を俎上に乗せている。彼がそれを取り上げたい理由と反駁の手順を述べておく[22]。ハバナ市で発行されている「レビソール紙」52号で F.R.（以下 FR と略す）という署名のあるプラ師の論考記事が掲載された。FR によると，この論考は前メヘレン大司教プラ師のフランス語記事をスペイン語に訳したもので，キューバ島の真の利益を知らしめ，今後辿るべき進路を適切に説いて

---

(22) Francisco Arango y Parreño, *Reflexiones de un habanero sobre la indepedencia de esta Isla* (Habana: Oficina de Arazoza y Soler, 1823), “Advertencia.”

いる内容だと紹介している。この記事に注目したアランゴは事態を重く見た。本記事はかの著名なプラ師の著作を必ずしも忠実に訳してはおらず，ねじ曲げられており，キューバにとり有害であると判断した。そして彼は冒頭に挙げた著作を公刊して反駁した。先ず新聞に掲載されたスペイン語訳全文を再掲し，次に問題がある部分に注を付して逐条審議に似た検討を行い，最後にまとめを述べる体裁を取っている。

2．アランゴの論点

この節では，アランゴがFRのスペイン語訳文に付した注を選んで，論点別に整理しておこう。

2-1. 現状認識

アメリカ大陸の現状認識に関連する部分が注1に当たる[23]。プラ師の原文と翻訳文とでは印象が異なる。原文は「（スペインは）アメリカ大陸至るところで離反されながらも，同大陸に対する主権を維持しなければならないと信じてきた」とある[24]。一方，FRの訳文では「かの領土の大部分が解放されたにも関わらず，スペインはアメリカに対する主権の称号を維持すべきだと信じてきた」となっているので[25]，アランゴがこの注で反駁している。

注1に見るアランゴの反論は次のようにまとめられよう[26]。第一の点は，FR訳は明らかな誤訳を含む点である。原文ではアメリカ大陸の各地域がスペインから離反していると記しているのに対し，解放されていると訳しているからだ。第二の点は，“解放”と言う語の含意である。この語を法律的観点から確認している。その原義は家長たる父親が子供に対する親権

---

(23) *Ibid.*, pp.5-6.
(24) *Loc. cit.*
(25) *Ibid.*, p.1.
(26) *Ibid.*, pp.5-6.

を放棄することを指している。これを国際政治の場に適用すると，母親であるスペインが離別を望む子供に解放の権利を認めないのが現状だから，解放にはほど遠いゆえ，この語を使用するのは不適当である，と結んでいる。

上の二つの考察を受けて，第三の点として中南米の惨状を例示することで，解放どころではないことを以下の様に強調している[27]。アルゼンチンの場合，血の海になる内戦，産業の荒廃の中，独立は保証されない上に，各個人の政治的自由の保証は聊かもない。また，チリの場合，アメリカ領事の報告を引いて，1822年３月21日に発生した同地の虐殺を示唆している。さらに，かつて豊かで今や惨々な状況にあるヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）では二度目の悲劇が生じた短期間の間に，四回の事件が目まぐるしく展開している。穏健な帝政を目指したイグアラ計画の発表。その後イトゥルビデによるメキシコ帝国の成立。その帝国の崩壊。それに続く全くの混沌状態が続いている現状がある，と述べている。

それに続けて，サン・ドマング島とブラジルとを対比させてキューバのあるべき姿を次のように述べている。

> “最後にハバナに語れ。サン・ドマング島と権威のあるブラジルと想起せよ。ブラジルこそこのキューバ島と同じ人種構成からなるのだ。キューバ人諸君，それらの恐ろしい幻滅に目を向けよ。そしてそれらの中で「諸君らの解放」を掲げる盲目的な相談役にどのように耳を傾けたら良いかを知ることになるだろう”。[28]

2-2. スペイン側の事情

アランゴはスペインがキューバを譲渡することがあり得ないことだとする。注３がこれに当たる[29]。原文，訳文ともに「一般的にいって，スペイ

---

(27) *Ibid.*, p.6.

(28) *Loc.cit.*

ンは割譲する準備がほとんど整っていない」である[30]。アランゴはその注で以下のようにまとめている[31]。周辺でキューバ譲渡が喧伝されているが，これは全く不可能であることをプラ師が考察していることに注目すべきだとしている。その際，考察の基本的な柱は三つにまとめられるとしている。一つ目は，スペインは国土のいかなる分割にも反対していること。二つ目には，キューバ島は，プラ師によってスペイン権力の中枢であると見なされているから，スペインにとり重要な島嶼であること。三つ目には，英国がキューバを獲得すれば，少なからず不利益が生ずることを挙げる。なるほど最初の二つは是認できるが，最後の点は疑問が多い。以上の様にアランゴは述べている。

2-3. 英国や合衆国の事情

注４がこれに言及している[32]。原文，翻訳ともに「英国は自分で保持できないくらいの領土と植民地を持っている。つまるところ，世界は一つの国に属することはできない」[33]という箇所に注が付されている。アランゴの論点は以下のようにまとめられよう[34]。ここに見るようなプラ師の主張が本当かどうかを確認する必要があるとする。この論考より前の12章分すべての記述を見ると，英国の海軍力は強力で，キューバ島を支配下に置いて防衛するだけの力量を持っていると読み取れるとしている。さらに，世界は一国だけに属することはできない，という主張は，他の国には当てはまるかもしれないが，英国なら可能ではないかと懸念がある。以上のようにアランゴは見ている。

また注５においても同様な主張が見て取れる[35]。原文，翻訳ともに「キ

---

(29) *Ibid.*, p.7.
(30) *Ibid.*, p.2.
(31) *Ibid.*, p.7.
(32) *Ibid.*, pp.7-8.
(33) *Loc. cit.*
(34) *Loc. cit.*

ューバは大変に広がりを持った国である」で一致している[36]。アランゴは以下に綴られるプラ師の記述に対して次のように疑問を提出している[37]。キューバを獲得することの判断は利益と不利益の双方を勘案していかねばならないという当然の前提をプラ師は唱えているが，キューバ領有に伴って英国に生ずる費用の多さしか提示していない点で考察上の欠陥があるし，それにキューバから上がる利益ですべての費用を賄得るという利点が考慮されていないのはおかしい。そのように疑問を呈しているのである。

さらに注７である[38]。原文，翻訳ともに「英国は，北米から南米に通ずる航路上にあるバハマ島にとても強力な前哨基地を持っている」[39]と記された箇所に付された注にあたる。アランゴはこの注で以下の如くに述べる。すでにカリブ海を制しているのにその上キューバを獲得すれば，英国の立場はいよいよ不動になりかねないので，他の列強はキューバ獲得に反対してきたので，獲得は未遂に終わっていること，また英国の動きを阻止するには両半球を結びつける必要があることをプラ師は語っているとみる。実際，西半球の強国合衆国にしても英国には対抗できない。英国が今のところキューバ併合を行っていない以上，合衆国が併合を強行すれば欧州大陸諸国に潰されるだろう。以上の様にアランゴは述べる。

2-4. キューバの立場

２－３ですでに挙げた注７では，キューバが自主的に編入した場合の前提条件を提示している。キューバの独立派に対して牽制を行うために，アランゴは次のように述べている[40]。編入をするための前提は三つある。一つ目は，キューバ島の全住民の同意を必要とすることである。しかし，ス

---

(35) *Ibid*., pp.8-9.
(36) *Loc. cit.*
(37) *Loc. cit.*
(38) *Ibid*., pp.10-11.
(39) *Ibid*., p.3.
(40) *Ibid*., pp.10-12.

ペイン人の心では自分たちの機嫌，習慣，言語を忘れたり，喜んで外国人の気紛れに従ったりするような堕落は許容できない。二つ目は，自主的な編入の前に条項や条件を一致させることが必要であり，そのための検討や討論が求められること。しかし，現在の環境ではそれは不可能である。三つ目には，キューバ島の歳入は，同島の業務を賄うのに十分であるが，その歳入の大部分は合衆国人が供給している商品で覆われかねない懸念のあること。このようにアランゴは独立派に対して冷や水を浴びせている。

注６[41]は，原文，翻訳文ともに「というのも，スペインにはその（＝戦争の）ための手段も意志もないことは確かだからだ」[42]に付された注に当たる。アランゴのその注の中で次の様に述べる[43]。自身は我々の自由が破壊されることを期待する輩では全くない。現在の憲法が変更されたり，穏健になったりする可能性はあるが，恐れる必要はない。恐怖心を終わらせるためには，二つのことを考慮すれば十分であろう。一つは，1820年以前国家はより苦境に立たされていたが，王権は絶対的であったので，恐慌を来すことなくあらゆる階層から尊敬を受けたこと。今一つは，革命がもたらす完璧なまでの破壊と誇張されて侮辱された絶対王政期とを天秤にかければ，明らかに後者の方がキューバにとって好ましい，と。このように，スペイン王政の庇護下にあることに利があることをアランゴは述べているのである。

注９は，「それ以外，疑問のすべては全く無益だった。そしてその主題のおかげで，私は長い間心の内に温めていた考えに引き戻される以上，次のように言わねばなるまい」[44]に付せられた箇所である。アランゴはその注の中で急進的な独立論に対して以下の如く冷や水を浴びせている[45]。すなわち，各民族の独立と個々人の自由とは別物である。独立を希求する余

(41) *Ibid.*, pp.9-10.
(42) *Ibid.*, p.3.
(43) *Ibid.*, pp.9-10.
(44) *Ibid.*, p.4.
(45) *Ibid.*, pp.14-15.

り，政治的自由がもたらす重要で効果的な利点の享受を全面的あるいは部分的に危殆に晒しかねない。独立は二の次で自由を求める代表例がカナダの例である。カナダ人は英国の支配にあっても自由を謳歌しているので，合衆国軍に侵入された時にも，合衆国の独立を羨むどころか，武器を取って防戦に努めたのである，とまとめている

2-5. 周辺諸国の姿勢

注10に関わる部分がそれに当たる[46]。原文・翻訳ともに「理性がそうすること命ずるように，キューバの運命をその他のアメリカ大陸の諸国の運命と結びつければ」[47]と訳されている箇所への注である。アランゴは次のように記している。独立を念頭に置くと，キューバの産物を輸入し，逆にキューバに快適さを与えてくれるような国々を周辺に持っていなければキューバの明日はない。しかし，スペインから独立した周辺の共和国がそうした供給や需給面の両面を満たしてくれるかと言えば実効性はない。その意味でアメリカ両大陸の革命の熱狂と一体化する必要はないのである，と。このように，功利的な立場から，他のスペイン語圏諸国の行動とは距離を置くことを示唆しているのである。

2-6. プラ師に対する不信

既に挙げた注 9 において，アランゴはプラ師そのものの正当性に異議を唱え，次のようにまとめている[48]。新聞の編集人たちがプラ師の政治的知識に高い評価を与えているようだが，自分自身の大義を損ないかねないので反駁を行う。もし彼らがプラ師の文学や筆遣い，想像力に賞賛を贈るのなら何も問題はないが，政治的見解や行動になると問題だらけである。1789年の名士会における行動ぶり，ポーランド大使に就任しての醜悪な行

(46) *Ibid*., p.4.
(47) *Ibid*., p.13.
(48) *Ibid*., pp.14-15.

動がある。さらに彼の予言者としての役割は，より多く見通すことができると信じている人こそ実はより多く誤った予言を行うと言える，と皮肉を交えながら結んでいる。

先に挙げた注10の部分で，アランゴは次のようにプラ師の所謂理性に疑問を呈して次の様に整理している[49]。より海軍力がある上にキューバの産物を消費してくれ，それと引き替えにキューバに快適さをもたらす物資を供給してくれる国と運命をともにすべきであって，周辺の独立で忙しい諸国とではない，と述べている。

2-7. アランゴのまとめの部分

上記のことから，アランゴはキューバ独立には反対している。その理由としては，スペインとは文化的な共通性のあること，その保護下にあることで秩序が維持され利益を受けていること。英国の脅威は否定できないこと。周辺の共和国はキューバに利益をもたらす貿易は望めないこと，等を挙げて，スペイン下にあることの道理を説いている。

逐条審議宜しく問題のある注を各個に論じ尽くした後，アランゴは最後に所見を綴っている。その中で核心は次のようにまとめられよう[50]。一つは，前からの流れを受けて，このキューバ島にとって独立の意志は不当で，実施不可能で破壊をもたらすということ。二点目は独立と自由とは異なっていること。独立すれば自由が無条件に獲得できるというのはあり得ないのである。第二の点は次の引用が余すことなく物語っている。

> “（前略）そして少数ではあるが，この件（＝独立）に関してとても執拗で頑固なあまりに自分の無謀さに気付かず，やろうとしていることをわかっていない輩がいる。独立という胡乱な言葉が心すべてを占め，貝と同様その言葉の内に自由という真珠が堆積していくと堅く信ずる

(49) *Ibid.*, p.10.
(50) *Ibid.*, p.27.

ことは，こういう表現が許されるなら，自由という音に囚われたまさしく偶像崇拝と言えよう。現実的な洞察力を用いない人こそ不幸である。その洞察力を用いれば，独立を求めるからといって自由と呼ばれる善を必ずしも享受しない社会が無限にあることを発見することになろう。それとともに，国家という名誉を望んだり，志向したりすることもなく，自由の可能性の利点を享受している他の社会があることを目にすることもあろう”。(51)

まとめにかえて

プラ師は，欧州の政変と秩序の再編に関心を持った。とくにスペインの崩壊，混乱を景気に従来植民地であったアメリカの諸地域が独立する状況に関心を注いだ。奴隷が反乱を起こしたサン・ドマングと社会構成が似ているが，独立運動が顕在化しないキューバは考察の対象だった。同島はやがて独立し，共和制を採用すると予測した。しかし，これに対してキューバ島の現地生まれの白人であるアランゴは反論を仕掛けている。キューバは列強の圧力から身を守り，貿易の利益を確保するためにもスペインに留まる方が有利とみていることがわかった。今後の論考では，アランゴの認識が有効な間，いかなる改革がキューバで試みられたか，そしてその認識が如何なる国際状況の変化で有効性失ったかを追求する必要があろう。

参考文献

Aguirre Elorriaga, Manuel. *El abate de Pradt en la emancipación hispanoamericana 1830–1930*. Caracas: Univ. de Andrés Bello, 1983.

Arango y Parreño, Francisco. *Obras del Exmo. Señor D. Francisco de Arango y Parreño*. 2 tomos. Madrid: Howson y Heinen, 1888–89.

Arango y Parreño, Francisco. Reflexiones de un habanero sobre la indepedencia de esta Isla. Habana: Oficina de Arazoza y Soler, 1823.

Benassy-Berling, Marie-Cécile. “Note sur quelques aspects de la vision de l’Amérique Hispanique en France pendant la premiere moitié du XIXe siècle,”

(51) *Loc. cit.*

Caravelle, nr.58, pp.39–48.

Bornholdt, Laura. “The Abbé de Pradt and the Monroe Doctrine,” *HAHR*, Vol.24, Nr.2, pp.201–221.

Pradt, Dominique de. *Les trois âges des colonies, ou de leur état passé, présent et à venir*. 3 vols. Paris: Guguet et Cie., 1801–02.

Pradt, Dominique de. *Des colonies et de la révolution actuelle de l'Amérique*. 2 vols. Paris: F. Beuchet, 1817.

Pradt, Dominique de. *Parallèle de la puissance anglaise et russe relativement à l'Europe*. Paris: Bechet Ainé, 1823.

Jiménez Codinach, Guadalupe. *México en 1821: Dominique de Pradt y el plan de Iguala*. México: Caballito, 1982.

Pezuela y Cobo, Jacobo de la. *Diccionario geográfico, estadístico, histórico de la Isla de Cuba*. 4 vols. Madrid: Imprenta del Establecimiento de Mellado, 1863.

Pierson, William Whately. “Francisco de Arango y Pareño,” *HAHR*, Vol.16, nr.4, pp.451–478.

Robertson, William Spence. *France and Latin-American Independence*. New York: Octagon Books, 1967.